竹取物語

中二編

菊川春潮園
岩井起家翻
楊洲周延画

萬鈴堂板

澤村田之助曙草紙

島鮮堂壽梓

二編上

A 497
2

48-8187

澤村田之助
曙草紙

第二編上之巻

芳川春濤閣
岡本起泉綴
揚洲周延画

島鮮堂
壽梓

交りて酒とる飲をるど上下の口やうまいも佛々常云て
やまぬ法師輩が中ふ空海と云るが左でのりやかも考るものを
云が能ふもはふ〳〵と工夫して竜陽を起し〳〵り然るほうして
其夷公然のことあれの宗旨の何ぞと問ふて何もも隨喜渇
仰して摂取不捨ふ行ゑ爰ふ影多しの郭巨をつる様ふなりかて
ゆくふ從ひ既ふ又不測の弊さ（穿起し来り今ハ初め許さ、ハしろ）
ぐらかい先ふ立ざる迄乃姿ふ及ぶい當世の人能く知る所多が近き頃
より上おい法律あり之を戒め下おい佛徒の妻帯を許なふ至り斯る
夷風えび多りぬ故ふ今の子供衆い此編の観正院が条下をんで或ハ真
ゝ〳〵思ひ当ふ有ふんゝと故ち爰ふ之をつふ穴賢けつして嘘を
つき夜の女性ゑと思ひ給へ

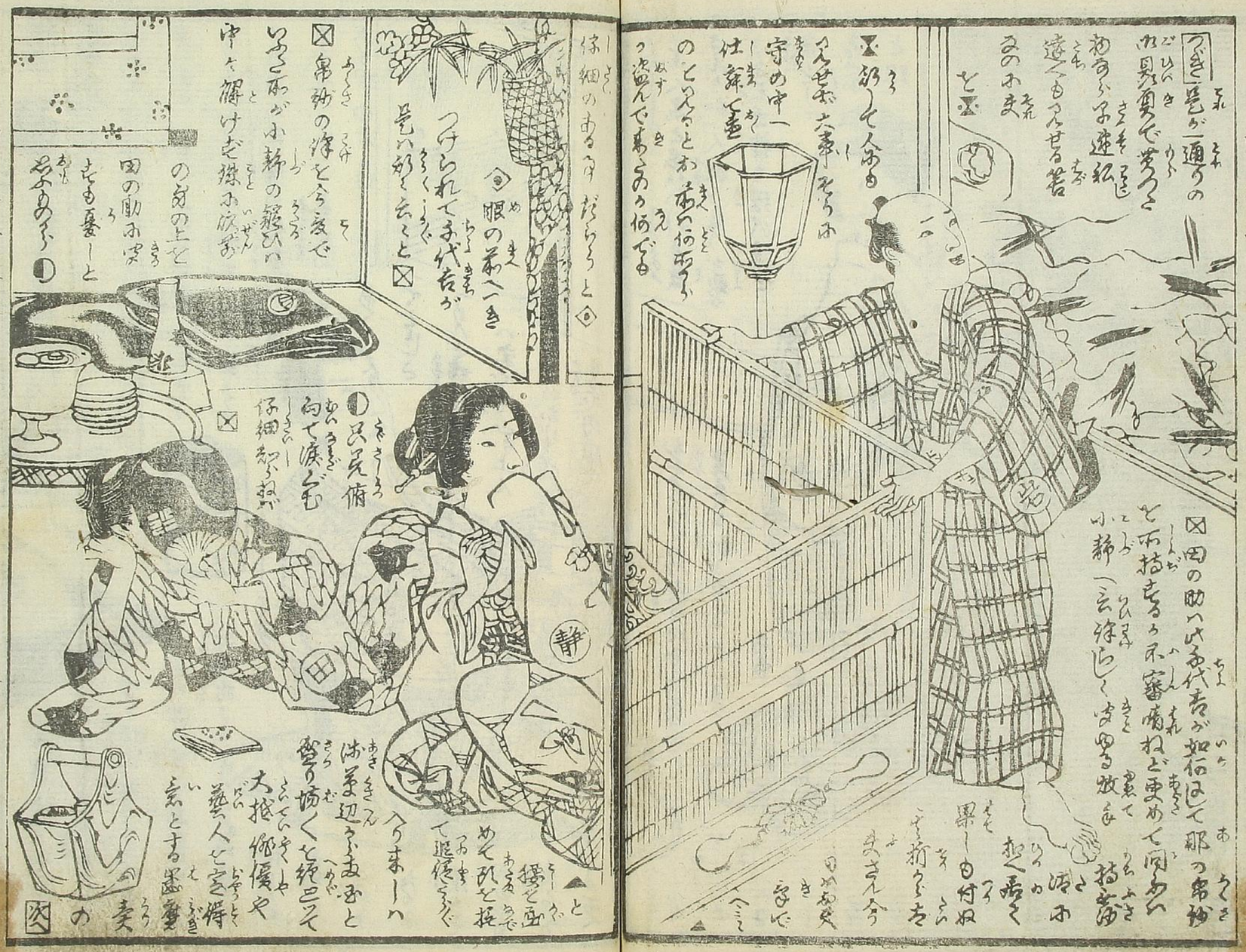
明治十三年八月

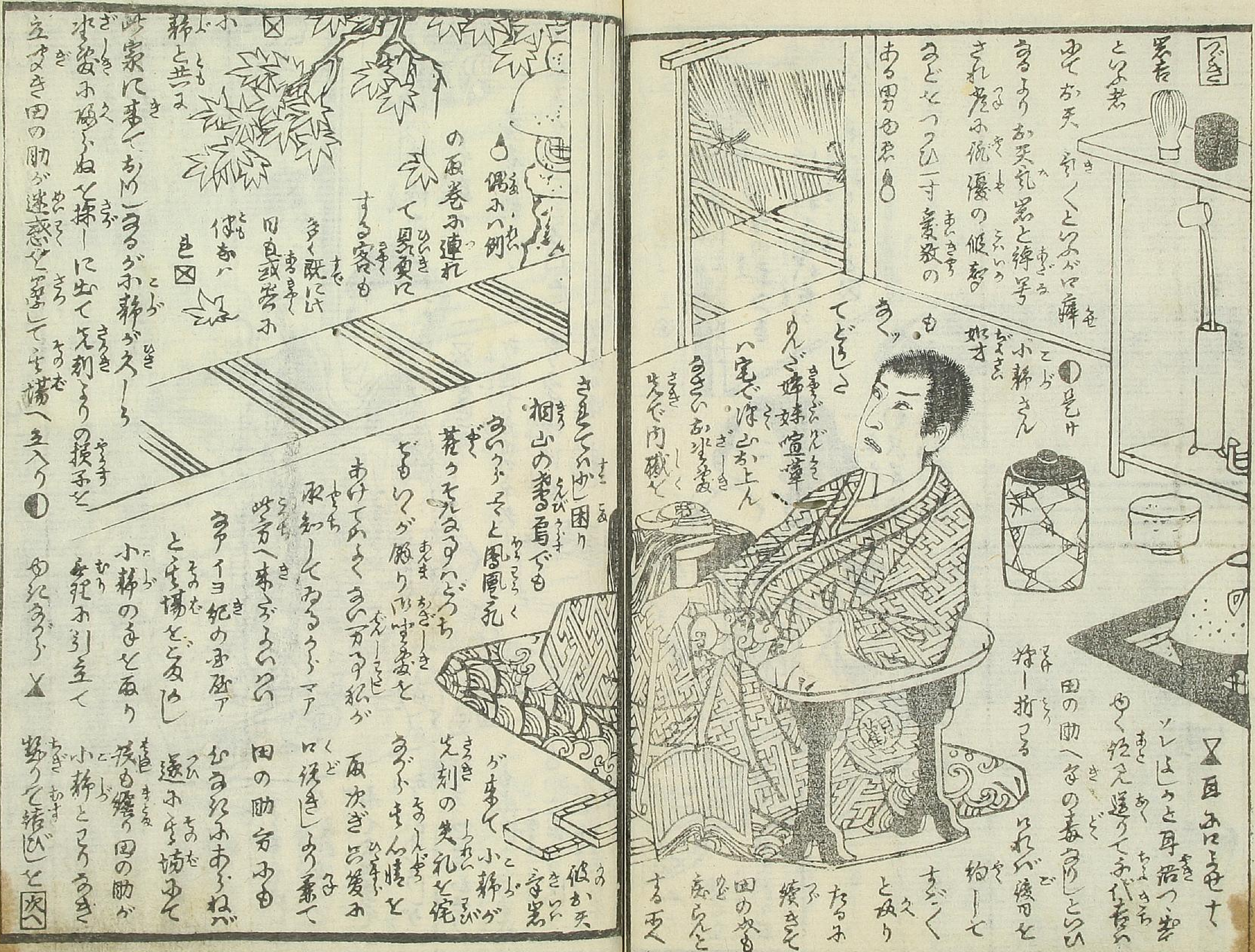
岡本起泉題

沢村田之助

經師屋又吉
觀正院

柳橋の藝妓
大幸


つぎ
静
田
若



つゞき

男君とりみ君ゆゑお天ぎくとりみが口癖色男よりお笑気君と綽号され花の役優の仮声などもつかひ一寸愛敬のある男也君

◐是け小静さん奴才

きくッ

てどうして めんご姉妹喧嘩ハ宅で深山お上ん あきい お米ざしき先で内緒で

⧗互ひに目を見合せ ソレはしつと耳招つゝ君ゆく先え逆りてちよつとお客へ 田の助へ客の毒かりしといひ 挨拶一つする はれが縁日を約して すぐくと立ち帰り たる中縁きを 田の助も座らんと する所へ

◐隅にへ例の庭巻に連れて男衆にする客も 多く既に 女郎衆に 伴ふ 色⊠

⊠小静と共に此家に来ておりしが小静が久しう座敷に姿を見せねば探しに出て先刻よりの様子を立ち聞き田の助が迷惑を察して其場へ立入り◐

さしてそれがし困り 桐山の香島でも 気のつく風凰乳 若衆それなりすがら ともしくが取り [illegible] を あけてみよく [illegible] が 承知してゐるからマア 此方へ来てよいから

彼お天 気味宇岩が来て 小静が 先刻の失礼を詫 あなたまん気の情を 座次ぎ此客に 口説きしより子

田の助方にも むまれにあらねば 多アイヨ紀の年座ア と其場をとりなし 遂に其場にて 小静の手を取り 旅も縁り田の助が 無理に引立て 小静とつりあき 契りて結びしを

ゆえなかり⧗

次へ

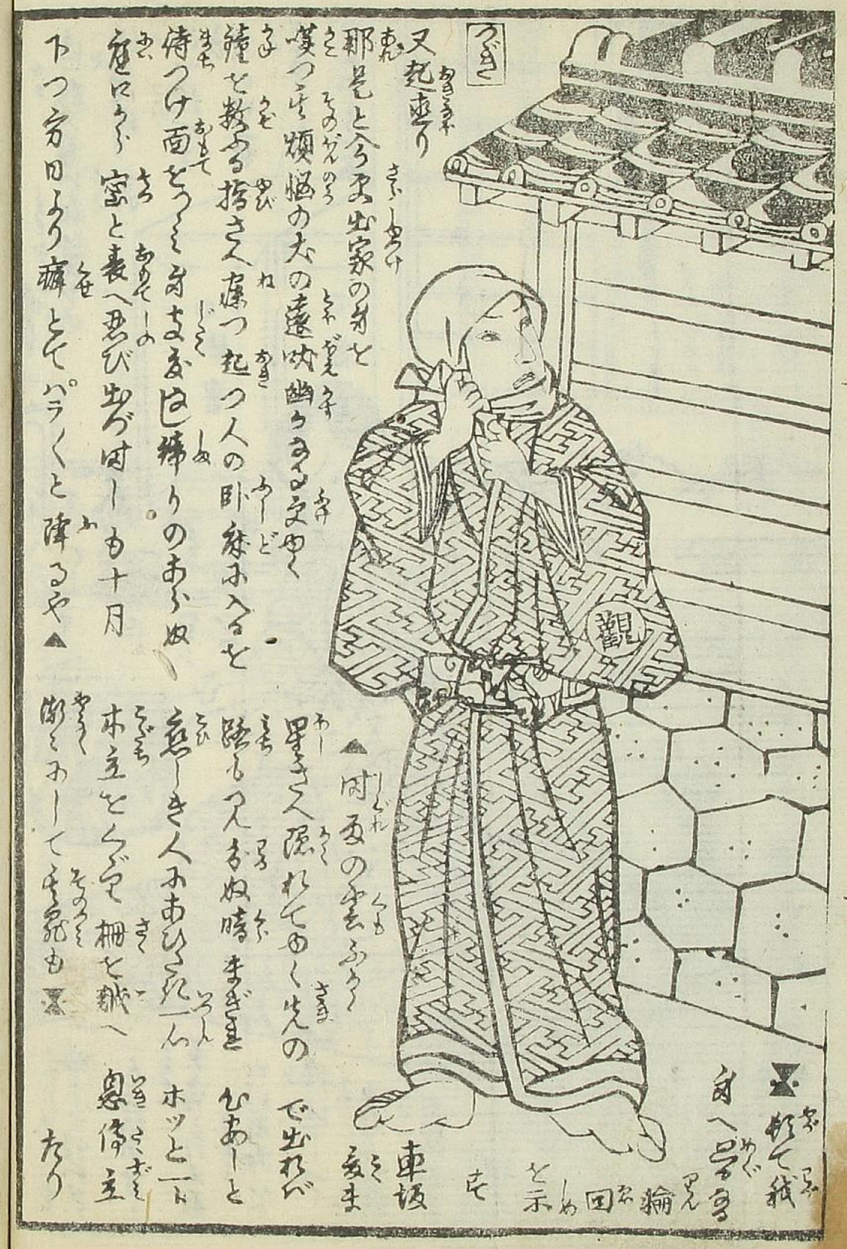
つぎ 縁ふ
して まつり
岩倉の親しく
田の助の方へ出入する門

忘恩の如く
打過す成田の年久し
ぶりにて伺ひ
又吉が傷ひまて

◐ 捨ておの寛典にて
催時中引
られ昨今引
続きから
年を改
く
帰て今日まで
知らぬ
何とも
でもありしかの
田の助も

▲ 歯磨売と変て市村
梦の長崎へ出
紀の国屋の
奴とあり
奴でも年の秋も過き冬の
初めとなりしが妙何世や上野の
観正院の
寺と遊掛つぎと ◐ 甘ぎ

歌書
雜



島田一郎梅雨日記　芳川春濤閲　三冊
岡水起泉編　五編　同切

其名高橋毒婦小傳　東京奇聞　同　七編　同切

白菖阿繁顛末　同　三編　同切

坂東彦三郎一流　同　三編　同切

澤村田之助曙草紙　同　五編　同切

御所櫻梅松録　鶴亭秀賀作　二冊　弐長入　十五編ヲ出板

地本錦繪　問屋　島鮮堂　綱鳥屋　浅草瓦町十二番地

[illegible]
[illegible]宇都宮
[illegible]

信和世羅

高砂さもの

あらけ浮の

さらし

こゝろ舞

中の巻

小田原
提灯と樽
さんかゝる組頭
ゆふ
肌
夜風と防ぎ
来かゝる女
が何ものぞ
怖れも
せず
二人が
組ふ手中へズッと
見出さと提灯ゆ覗くと見
と親四院がまゆくいさと
お義せば其の男女は流石
手身構へ怖く
ぐ
蒙さ
と提灯
と揺る
と
自附まちかゝ
中々蒙す紙入ゆ女が
ぐ
抓りあてゆ
ぐ
面上ると夫と
ぐが付
遣しかゝ親四院

つゞき 奪ふ人走機とゆ渡入の口ぶあ紀中ろ蔵
敷る一通のる紙と捨ふ暇も無く差
荒吉

☒突退け足元ふ走る
女の後今を取て走る
引被り
逸足也
仁左も元禄
走り走り言
不測さふ
考荒ゲテ
あと

❶尚も提灯を振り廻し
拾ひ上る一通の反紙と開ふ遣すをそれを紙
越と知るや考方が横ふ〻〻と横ふふ
如い藤をつき開ふば元が提灯を捨ひ面り汚泥
と拂ひつゝ差荒の紙を足遣つて獨り何ゆう独言言
山若衆と如い何考るや後ろ自づと考る事あべし

☒行方知れむ
例へ
如い

○卯ノ疾く和代吉は先の日海岸田甫の
瓢亭うろう田之助に別れ帰りし
小静が出母お寅
小静が母お寅と
姉といふ角出ふあんにふたりの
も迷らず風の粉のいとぐ
あれ心細くもあふはけ又
彼の誘子而松が感れる
体をあれ出て えーく男
ねば撰子と寄んと或初
祢術ぐ小托けて家を出
て 撰 路次々々裏河
岸へ来て
白松小出云
ど白松小出云
〜うい宜い和ぐと
晴き図
白松に何と
と世話を晴き
事と来ないたが
後い小静が何ろ和
事く来いた成表情要き
父の病
と
寄われど
白松
と

つゞき

一寸宅へ来ておくれ招

▼四の助がつぎやうに尋ねやうく

きやうりつでも宅はみるぐ

と云て居こぶ毎日物ごろうて

と云葉をつゞけて別を

今日と尋ねみんぐ外でもきい

わりひが

経過ても

書信をば放送会

せると面白い推らの

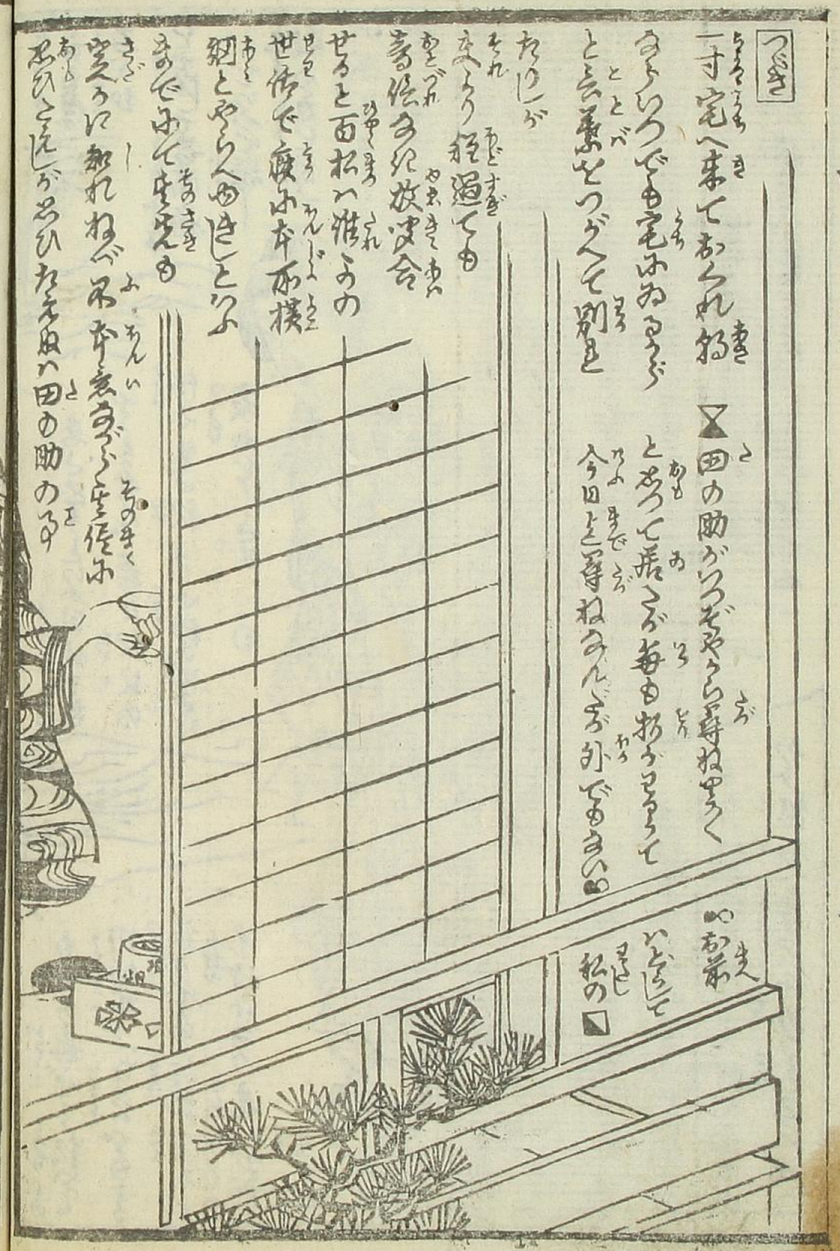
世伝で廃れ本所横

剣とやらへ出しとい

まのをみて生先も

実うに知れねば不安ぐつ生徒は

あひたえぬ四の助の



みて既に小新とも変りと

とあしとあれど離るる

ムハ又表面ハ姉よ

妹と互ひに睦むうれ

ど姉さて表地の二ツ文字屋の南文字

つのめ立つ見ハ自づと現つる中ハ小新

ハ一隙恐しく千代吉が嫉妬と見つけて

心の恨を晴さんと常ハ

目をつけ為る事ハ千代吉も

知ぬ事ハ知れど強を窺

ひ今日も是を隠て出来所

姫の活合茶屋鍋川の二階ハ田の助

ハ出合人目を忍ぶ睦会のもてなし

次へ

つき 伝しそと今年不関ろれて
平代吉いふしに義りの今ろ
云義る伝田の助い何故
そんなふ云義ろ知ら程ど
私い素ろ知ろ縁業
ぐ面云解儀ろのみで
お義も知ろの通り
三人や四人の嫁婿
もあり己ふ柳橋の
義義義荒で不図しろ
義理づくで
大喜さんや
小新さんと

縁しろ文
句できひと
義義義睦
面不遠引
きろねば平代吉
いふ様と進め
それでやアお話
しゃもも知
じきろ己ふ附
ろの身の文伝し
と云ろ
ろどに
必ず

那
此所い平代吉ぶ
田之助へ物
ぐろの体を
あくんせーせ
中
でいみる
もの。

行末
うみて女房
あとあふい
お義ぐろう
のふお方が

とも
義義
と
ろ
と下
きろ
と歩ろと
ぎけで
義ねん
ぐ体生

紙も洒落を
愛で附あろう
きろ おちひと

の義の比
久の義義
上井豆義
の様義で 次へ

つゞき 紙父壺屋と
共ふ見聚を商ひ
ゐるふ姫お若ゆて
果物ゝ即ちまり
拾ひしと称て
物編ふありしを
要しく依し

※紙父さんいまゝ病気ゆゑ
ふ困ゝ放下谷山橋町の木賃
宿へ移りしゞ其ゆ
こふ生活もあく殺ゆゑ
たと浮と河の悪きといひ
捨てんづきオヤ紙しと
ゆがツイ紙れ[illegible]
ゆゑ[illegible]と面ゆげて
田の助の紙とさて
のぞき那河紙い男と
十一で懲されとる
ゆいれどゝ思しい
ふ方ぞと辞陳の
強ぎも忘れて見

◎食菜でも海山あげて
よく快くする積り心算

さしてと
俗ゆ
現
生
紙が
父さんと

▲ゆいて
癖ふゆと不仮とて
宿の伯母さんの
世話でお金を

知れど◐
備り紙いあの
去世俗一苦
女ゆ英ゆれて
毒ふゆ祖父

遠る内蔵して
ゆれと思ひ
紙を拾ひて
さんに◎

居ゆ
き洗
紙ゆ

◐生活ゆ
ゆ出家に成と
つるゆ都て代身の為でゆいと
寒々おるゆ思つて活ゆ力と蔭して※

大ゆに
拾て癖ふゆが縁で
ゆありしゆ日外発火の焼
青柳で始めてあ老ゆ

やゝゆか方と思ふ折柄の

つゞき 湖ゑ捨ての井源い坂で

ある事ゝあ、夜くもあへべこそ
身の落命をきまぢふ
ぬしゝとゝの不便をと
思てさ求ゝ捨ぢふ力と
あゝてと惚ゝ身い累故ゝ死事も
釈田ゝ〳〵

さも
嬉しいふ

出で
二落ゝ

柳湯とゝ風呂屋ゝ五ゝ
寸湯りて急き彼家へ帰ゝ
ゝ
ゝ

名所細見 東京新圖

皇國名物名産 色入小本數品

大日本皇國 物産名産 徳川年代雙六

滑稽 語加歌多 大晦日盛裏双六

小形加留た数品 新形双六類品〻

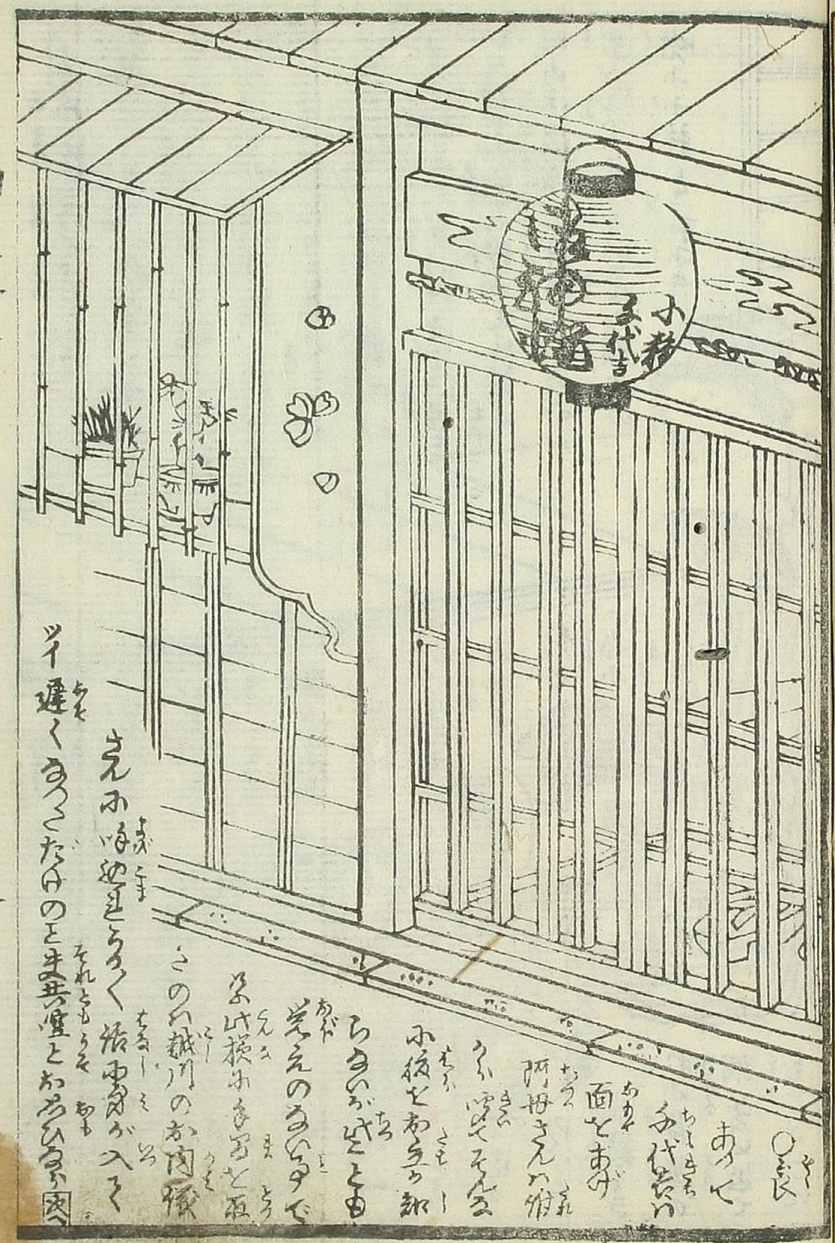
新形折本數品

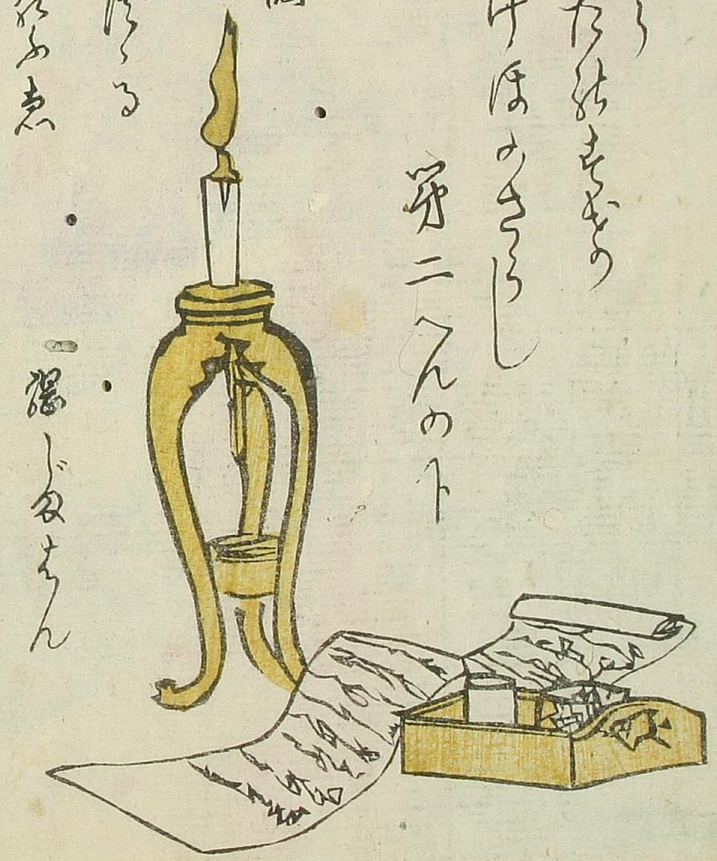
亀 地本錦繪 問屋

浅草瓦町十二番地

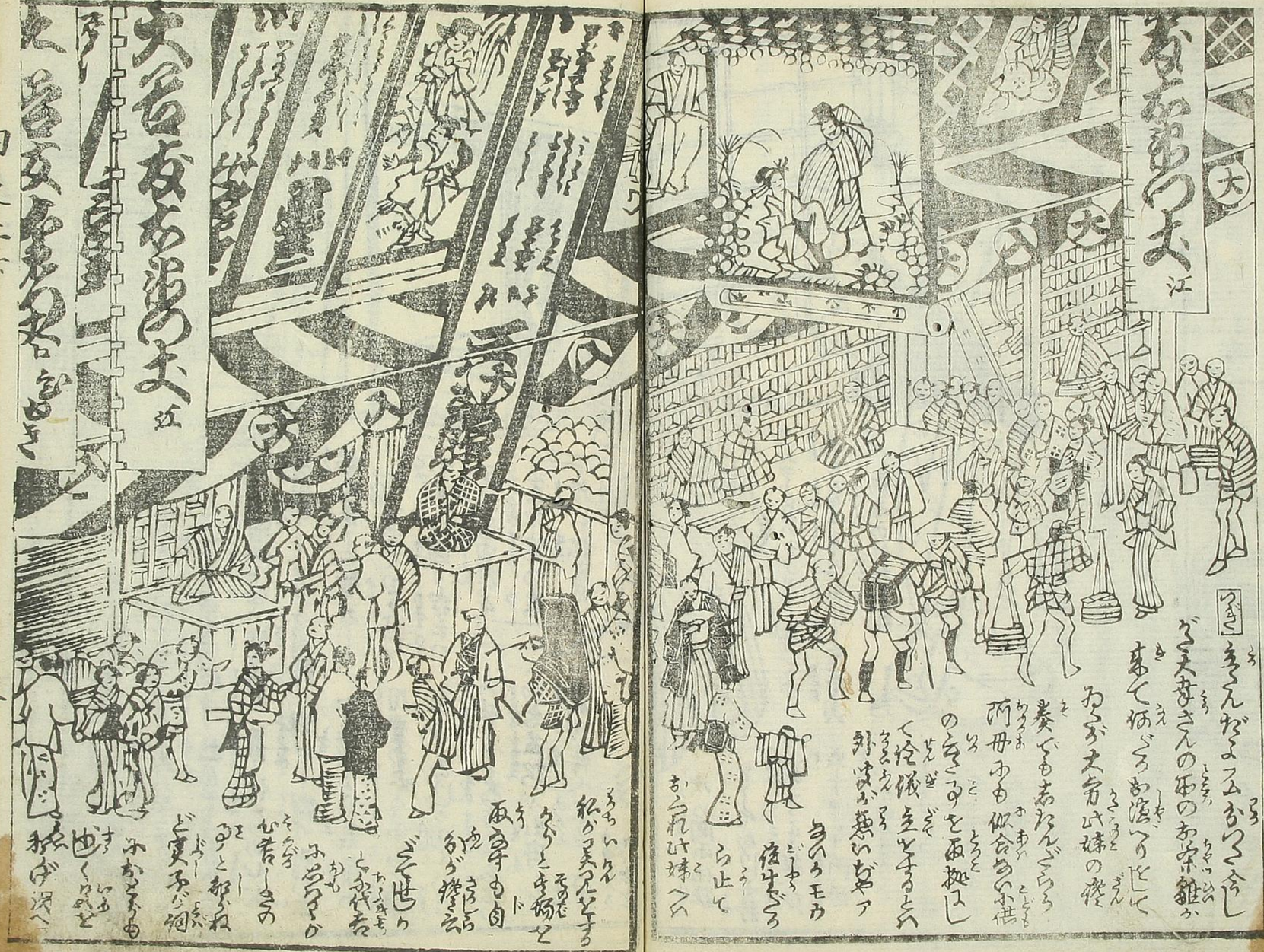
島鮮堂 綱島亀吉

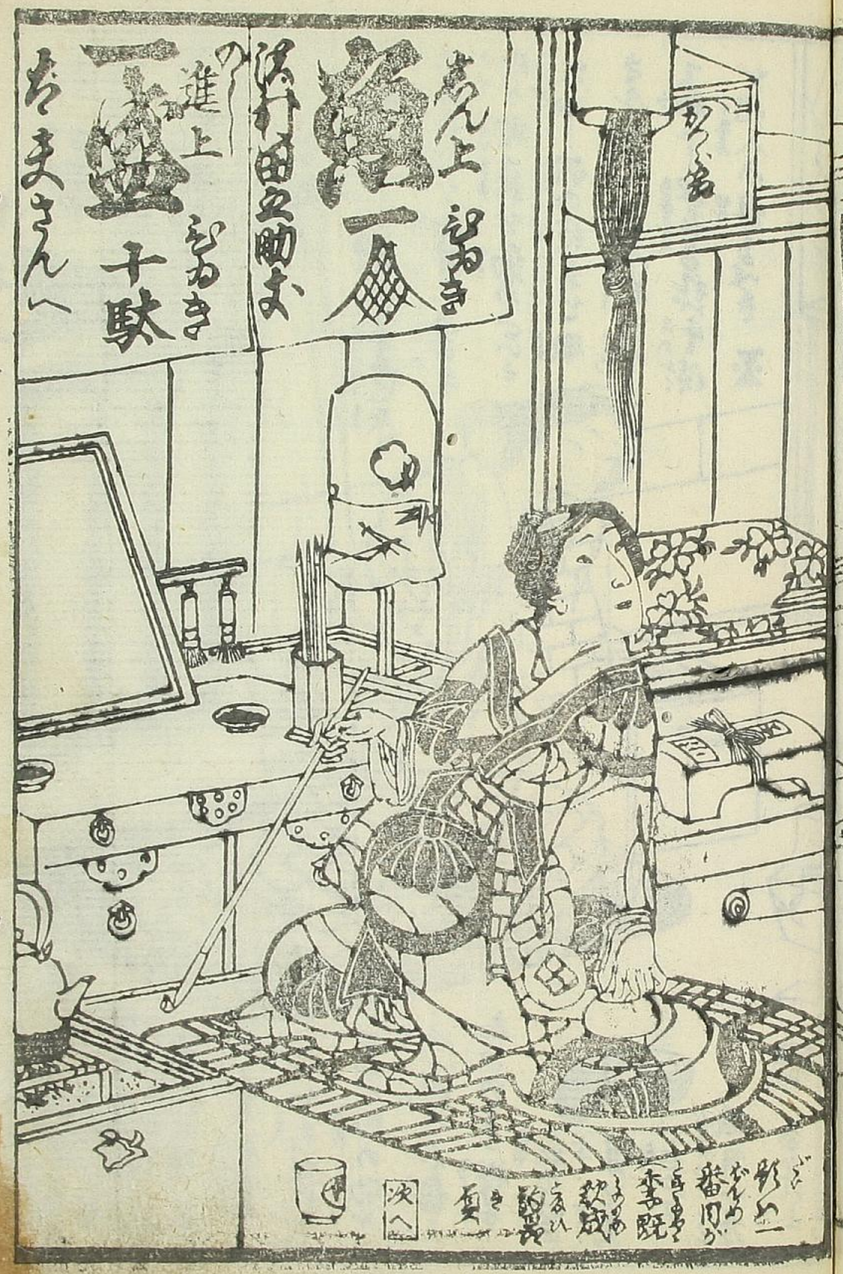
揚洲周延画





寅


おもちやのまつり 江
大名屋敷おもちやのまつり 江


進上
千駄
次へ

つゞき　二番目ゲ
（桜狩月笠姿）
ゆゑ中幕（大友）

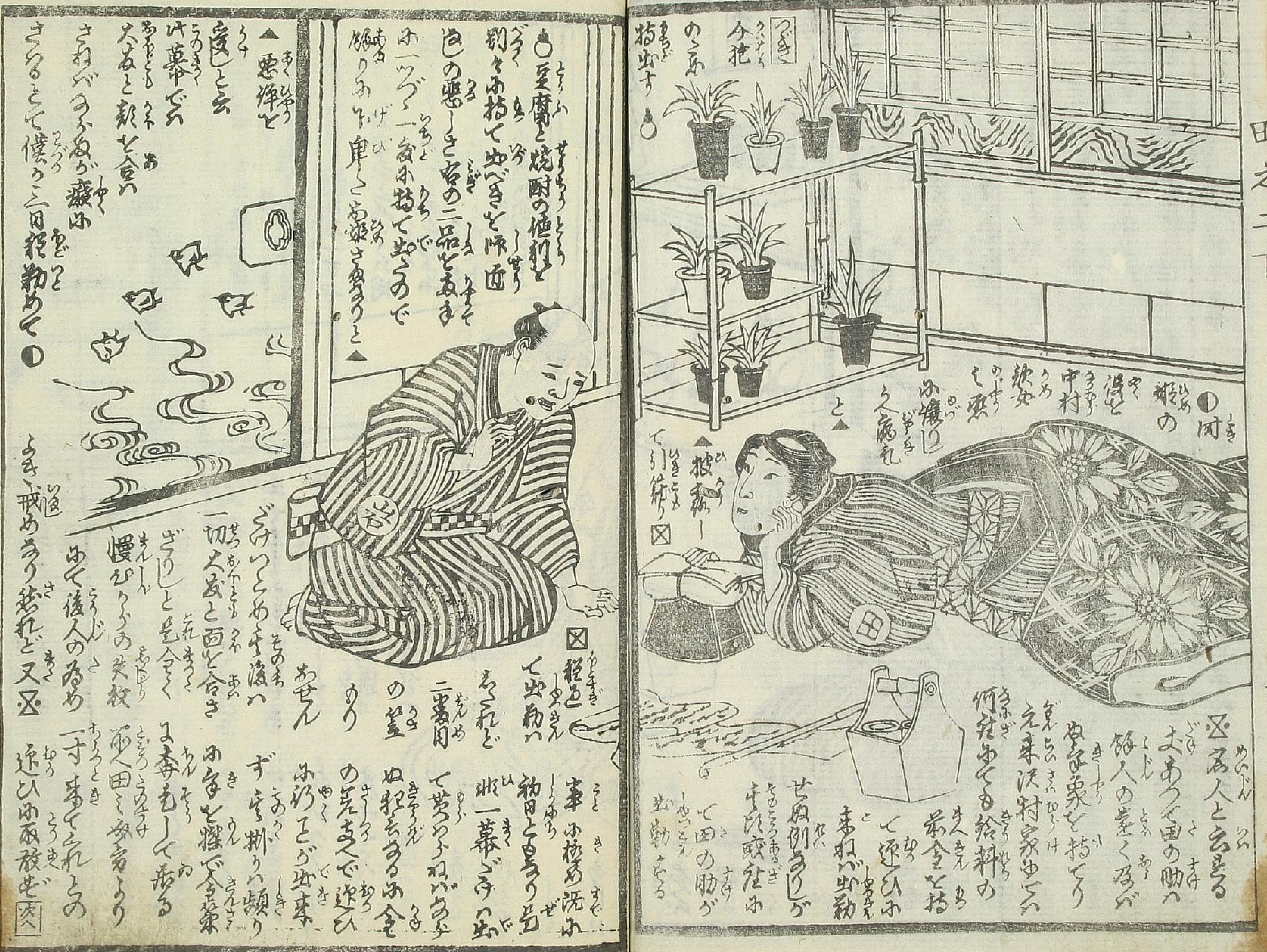
▲宵

見ゆるとゝく美丹安達一示
の三の切を出せゝゐ田之
助が独茶を勧めくれと
云出し別の我云を徹
さんとせゝも大友の者
と加へ犯云あれば生後
と滅入ゐ嬢るべき ▼

●物のべきと思ふ侮る
あらう市川新車
（後市川之助）の詳
に知り生家
接と見たれど
義て田の助が
家漫なる嬢と
あるのゝ帽子
祝の紫
義と光
の壱の
振袖と左
あらびと

▼あらびとそ之を
断り生代り縁金代紀
と一幕加へて対姫を田之助が
勧めさ色るとゐして潔く別りい
つゝしゞ実ゐ見て大友と田之助が
互ひに軒りあひとゐ対
田の助い対姫ぐゐんやと一番大友の
袖茶を蹴茶さんあのと一番 △

△乳ゐんで
生濱枝を先茶まゐ
尋れんと世ご吹られ
い岩井紫若（今の半四郎）ゐ
手角の三浦之介氏



つゞき　分抱のかね持出す○

◐聞なれぬ姫の浮名を中村歌女も聞ゆ嫌りこ病気と▲

▲披露し筆をとりて引籠り☒

☒名人と云ふる其あつて田の助へ弟子の名人の甚く孫が嫁を兼を持ちて元来沢村家の何故ゆでも給料の生え其金を持て遠ひに来ねば出勤せ座例ありしが此度座へ田の助が出勤する

○豆腐と焼酎の徳利と剃刀を手に持て出るべきを師匠に悪しき者の二品を手に持て一づゝ一度手に持て出るので嫌がられ卑しき有様になりと▲

▲悪評と良と云此幕で大入の当りを取れされば身にも損が無きるとて僕ら三日程勤めて◐

良き所の道戒めなり然れど又☒

☒私出勤へしかれど二番目の蓋あり　おせん　毎に極めて洗はれ初日と自身の芸出一幕ぎりへ出てもつれば有のぬ稽古するに金の苦労で遠ひに行事が出来ず芸事掛りに頼りに気を揉で金策は奔走して在る

ごけつとめて後は一切大入と面を合せざりしと是合せて慣ひならぬ失敗両人田之助方より後人のためて一寸事でもれこの遠ひに成敗せ 次へ

つゞき

出向と今日初日じゃと
いふ伺故私と逆ひ申来
て入れぬのゝ初日ゆ一すぐ
も面を出さるゝ人間
起ぐゝさいとゆ云茶ゆ
関ゆ一て居今と次へ
つゞき代の出向実と

○最先とゝ出来ぬと
笑入ぬと再ゝ押久して
彩とある内四の助ゞ裏口
ゝゞ何見ゝ出行しに
又例の癇癪で怪びゆ
出て来まゝ見ゆのであ
らゝと力と為しく
年辺と称せ人遣り
の岩吉ゞ来ぎ居ゞ

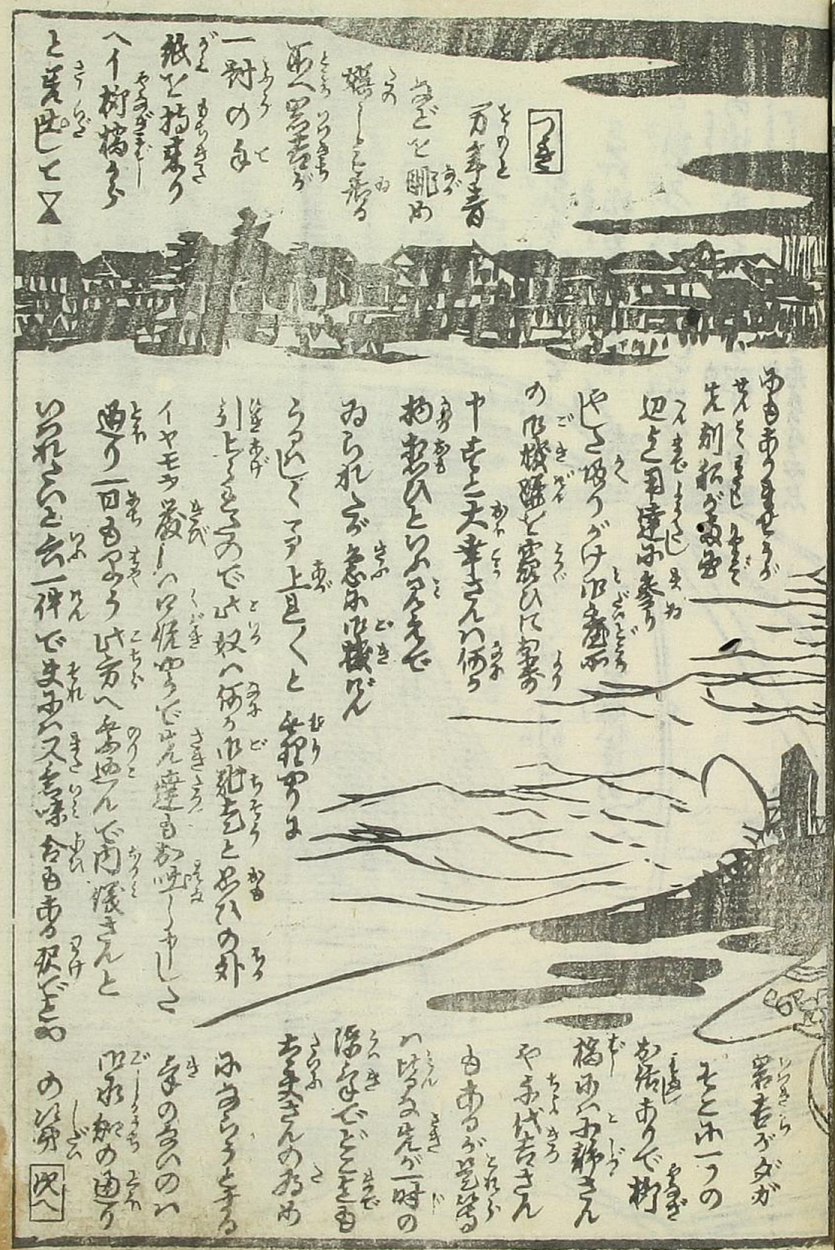
○伺を千振ゆ
言ぐのゞ居ゞ
さんゝゞモウ
疾くゝゆ居
へと来ることの
ゆ伺れも繋る
怪びゝゞ
戻つて居ると
乗ゝ乗
怪ゞ
怪ゞ
しく
あに

▲新吸〜伺年今日限り茶金白〜き
出勤とて下さる模ゆ取色て上怪ゞ
見い驚来の家法なれば今文これと

一月 生乳 貨の 面白

盛 とふ 和その 年も 松月

とゝり芝居も休業中ゆ
四の助い徒然ゆあゝゆ小説
ふ森鴎び秘密の 次へ



つゞき

とろと大きさん
い素くの通り考え
さんざめめいどれ程
レコと思してみろ
約束まさんせ
まごろ〜ちゃきん
の笑い約束と
みちろこのでの今夜
の約束ひが叶いさまを
まび花魁考きさん
と紙ちろと美出して兄さる
この張でありまたが那人の
懐中へ私が一切約束して居きすめ

▽

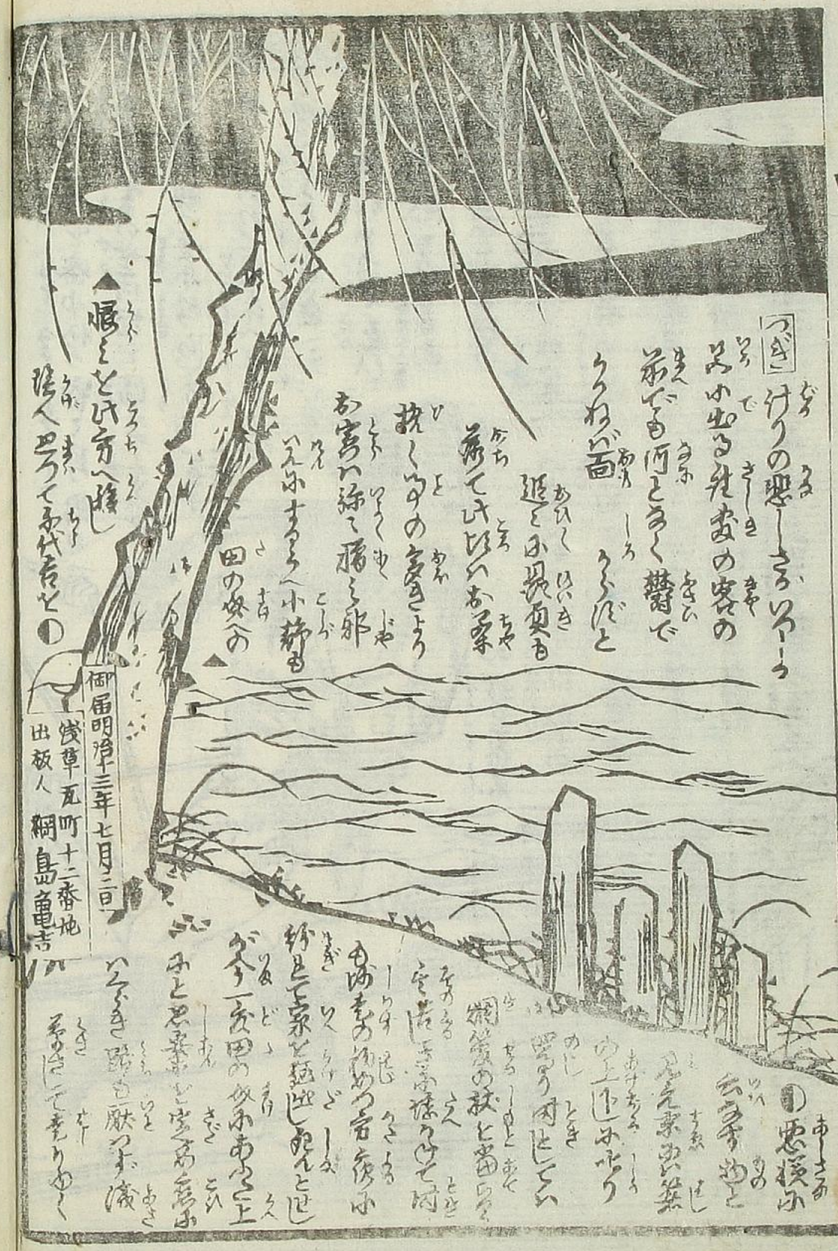
吹て伺れる
聚るく中の別て
青彩夢の栄住人の

百

約束しへいと声と密め伺ろ密と耳借き
あひあでは業の世話切と傳て走いて
とふと田の助い受ふ約束おっとろ
そうあしといられて居者へ自分の約
束のあるへと名ぎき喜へ出てあく
約束に後約束もあく五
のお波数男のの表面
て抵抗ハせねど田の助い
柳橋の花柳家業
引入と屑毛と落さ世女房
因縁ふ思ふるふぞ思恩最頂の
婦女ちへ是と田の助と空交で
ありしとも変数天者ご是々と▽

○約る家業
貧の
い考とおれど生性
源国女めて四郎一図小田の
助が赤ゃうず長崎を実と
粉と切さるの自分
今夜男と袈裟ふ是々と▽

のとを
ふくと
おびつげて



御届明治三年七月三日
浅草瓦町十二番地
出板人 綱島亀吉

島田一郎梅雨日記　芳川春濤閣　三冊代入り
岡本起泉繪　五編　よこ切

共名高橋毒婦小傳　東京奇聞　同　七編　よこ切

白菖阿繁顛末　同　三編　よこ切

坂東彦三・侠一流　同　三編　よこ切

澤村田之助曙草紙　同　五編　よこ切

御所櫻梅松録　鶴亭秀賀作　二冊代入
十五編ヲ出板

亀地本錦繪問屋　浅草瓦町十二番地
島鮮堂　綱嶋亀吉

010190517107

内閣文庫

沢村田之助記

丸冊之内

本郷[illegible]